

【学生投稿論文】

「プロスポーツが地域にもたらすもの―

Jリーグ・ガイナーレ鳥取を例に―」

公共政策大学院 八期生 門脇 康太

はじめに

プロスポーツという文化が、近年、大都市だけでなく、急激な勢いで日本全体に広がってきている。プロ野球における北海道日本ハムや東北楽天の誕生や、サッカーJリーグ、バスケットボールbjリーグの誕生と急速な拡大などの動きを見ていると、その勢いも想像がつくであろう。

さて、このように近年急速に誕生しているプロスポーツチームは、地域にどのようなものをもたらしているのだろうか。二〇二〇年の東京五輪開催を前にした今、改めて、私たちの身近なところにあるプロスポーツの価値を、一九九三年に発足したJリーグと、Jリーグに加盟しているチームの事例を検討することを通じて考えてみたい。

Jリーグとホームタウン

日本初のプロサッカーリーグであるJリー

グは、一九九三年に加盟チーム数一〇チームで発足した。その後、急速にチーム数が増加し、リーグは三部制にまで拡大した。二〇一五年現在、加盟チームは五二チームにまで拡大している。

Jリーグは、日本のプロスポーツにおいて初めて「ホームタウン」という概念を採用した。ホームタウンとは、単なるチームの本拠地や優先興業地域という意味ではない。『Jリーグ規約』において、「Jクラブはホームタウンにおいて、地域社会と一体となったクラブ作り（社会貢献活動を含む）を行いながらサッカーをはじめとするスポーツの普及、振興に努めなければならない」と記されていることから分かるように、ホームタウンとは、そのチームと地域社会が一体になり、スポーツを通じて地域を作り上げている街のことを言うのである。言い換えれば、Jリーグチームは地域と運命共同体にあると言っても過言ではないであろう。

このように、地域と一体となったクラブ作りの推進を明言したJリーグは、全国各地で大きな支持を受け、Jリーグ加盟を希望するチームが急増した。Jリーグもこれらのチームの希望に応じて加盟チームの枠を徐々に増やしていき、現在のように全国各地にJリー

グチームが誕生したのである。

それでは、Jリーグチームは地域といかなる関係を築き、どのようなものをもたらしているのか。本稿では、筆者の出身地である鳥取県をホームタウンとしているJリーグチーム「ガイナーレ鳥取」の活動について記述することを通じて検討したい。

全国最少県の挑戦「ガイナーレ鳥取」

ガイナーレ鳥取は、二〇〇五年末にJリーグ加盟を目指すことを表明した。その後、長年のJFL¹での奮闘の末、二〇一〇年によりやくJFLで優勝してJリーグ加盟条件を満たし、二〇一一年にJ2参入²を果たすことができた。しかし、二〇一三年にJ2で最下位となったため、二〇一四年からはJ3に降格して戦っている。有名な選手としては、かつて浦和レッズや日本代表で活躍し、「野人」の愛称で親しまれた岡野雅行がいる。岡野は、現役生活最後のチームとしてガイナーレを選び、二〇一三年の引退後はチームのフロント

¹ アマチュアサッカー最高峰の全国リーグ。Jリーグに加盟するには、まずはこのリーグで優秀な成績を収めなければならない。

² 当時Jリーグは2部制であり、現在のようにJ3はなかった。

に入り、現在はGM（ゼネラルマネージャー）を務めている。

ガイナレのJリーグ参入は、人口が最も少ない県の挑戦として大きな注目を集めた。一般的に言って、ホームタウンの人口や経済規模は、大きいほどチームにとっては有利である。その理由は、スポンサーや観客動員といった要因がチーム経営の面で有利になり易いためである。そのような中、ガイナレは地域とどのような関係を築きながらJリーグに参入し、現在もJリーグの場で戦っているのか。地域内の様々なアクターとの関係を見ながら検討していきたい。

Jリーグチームと行政

Jリーグチームは、行政から何らかの形で支援を受けている。その支援の量は、一般的に経済規模の小さい地方になるほど大きい。その理由としては、先述のように、地域の経済規模がチームの経営状況を大きく左右するためである。現在、Jリーグチームは平均して営業収益の約五割を広告料収入、約二割を観戦料収入に頼っている。このような状況下では、経済規模の小さい地方のクラブが行政の支援を求めるのも当然の帰結といえよう。

ガイナレに対しても、行政は様々な支援

を行っている。まず、直接的な出資として、鳥取県は二〇〇七年に一〇〇〇万円の出資を、また、Jリーグ参入決定直後の二〇一〇年の末には、財政基盤強化のために鳥取市など県内四市と県が合計で五四〇〇万円の出資を行っている。ただし、Jリーグ参入以後、行政からの出資の動きは見られない。また、出資以外の金銭支援として、県はチームの遠征費及びチーム主催のサッカースクール運営費の半額補助を、鳥取市は試合開催時に観客を駅や駐車場からスタジアムに輸送するシャトルバス運行費用の半額補助を行うなど、様々な形で金銭支援が行われている。さらに、ハード面の支援として、鳥取市はチームのホームスタジアムである市営サッカー場³の大型映像装置や、チームの練習場やクラブハウスとして利用できる市営スポーツセンターの整備などをを行った。

これらの事実を見ると、ガイナレは行政から多大なる支援を受けているチームであることが分かる。しかし、ガイナレは単に行政から支援を受けるだけの存在ではない。行

³ 2013年までは全ホームゲームを開催。2014年は、一部の試合を米子市の「チヌーブYAJINスタジアム」において行った。

政にとってガイナレとは、地域の情報を外部に発信する存在であるとともに、行政が施策を遂行する上での良きパートナーとなっている。実際に、鳥取県とガイナレは、県の情報発信や地域の活性化を連携して行うことを目的とした包括連携協定を二〇一一年に締結している。具体的な事業としては、アウェイゲームにおいて相手チームのスタジアムに県のPRブースを設置する事業や、最近のユニークな事業として、全国のサッカーファンに高い知名度を誇る岡野GMを、「鳥取県代表監督」なる架空のポストに任命し、岡野氏が県内の観光名所や名物をサッカー選手に見立てて紹介する内容の観光誘致動画を作るといった事業がある。

これらの事実を見ていくと、行政はJリーグチームを地域の「シンボル」とみなして有効活用するとともに、チームの経営に対する支援を行っており、また、チームも支援を受けることによって、チームの運営環境やサポーターの観戦環境の向上などを図っているといえる。すなわち、両者は互いに共存を目指し、支え合っている存在にあるといえよう。

Jリーグチームと地域経済

Jリーグチームは地域の一つの事業者であ

る以上、地域経済に何らかの効果をもたらす存在であることは言うまでもない。それでは、Jリーグチームは実際に地域経済にどのような効果をもたらしているのか。

二〇一三年に鳥取市が発表したところによると、ガイナレが二〇一三年に鳥取県内にもたらした経済波及効果は約八億八〇〇万円、そのうち、ホームスタジアムのある鳥取市にもたらした効果は約八億三〇〇万円だということから、Jリーグチームがもたらす地域経済への効果は、主としてホームゲームの開催時に発生することが推測される。

それでは、ホームゲームの開催を通じて、地域においてどのような経済活動が行われているのか。一つは、スタジアムにおける消費が考えられる。スタジアムで観客が行う消費活動は、チケットの購入だけではない。スタジアムにおいては、飲食店の屋台やグッズの売店が出ている。ガイナレにおいては、飲食店の屋台群を「G's deli」と称して展開し、県内の飲食店約一〇店が年間を通じて出店しているが（下写真）、地元産の食材や地元の名物料理などを含めた多様な商品展開を行っているほか、チームが主導して店舗共通の企画を毎試合のように行っており、飲食物販売を大きく盛り上げている。実際に、ホームゲー



G's deli

ムでは毎試合非常に賑わっており、ネット上のスタジアム評価サイトなどでも、「G's deli」の評判はアウエイサポーターから非常に高い。ところで今、アウエイサポーターという言葉が出てきた。アウエイサポーターとは、ホームゲームにおける相手チームを応援するためスタジアムにやってくるサポーターのことであるが、彼らも、地域経済にとっては重要な存在である。人口減少社会を踏まえ、近年、各自治体は観光政策に力を入れているが、その中には、スポーツツーリズム、すなわちスポーツを活用した観光というものも含まれ、

アウエイサポーターはその担い手として期待される。特に、鳥取県においては、観光入込客数が全国の都道府県の中でも最下位クラスであることから、ガイナレの試合に来るアウエイサポーターは、貴重な観光客でもある。実際に、二〇一一年一月に行われたFC東京との試合では、FC東京がこの試合で勝利すればJ2優勝が決まる環境だったこともあり、約一五〇〇人のアウエイサポーターが鳥取を訪問した。東京発の航空便や県内の宿泊施設は満員になり、一試合での経済波及効果は約三九〇〇万円にも及んだという記録がある。このように、ガイナレは客単価の高い県外からの観光客を一定程度集めることができる存在なのである。

さらに、ホームゲーム外の所でもガイナレは地域経済に影響をもたらしている。二〇一四年に、ガイナレはチーム強化のための募金プロジェクトを行った。このプロジェクトの特徴として、一定額の寄付をしたら、県産の海産物が寄付者に対して贈られるという点がある。これは、岡野GMが県内の水産業者にチームへの支援を要請した時に、「ふるさと納税」をヒントにして生まれたアイデアであったが、このプロジェクトはネット上で大きく話題になり、最終的に約二六〇〇万円の

募金が集まった。つまり、ガイナレを通じて地域の地場産品が県外に発信されたとともに、一定程度の経済効果ももたらされたのである。

ここまで述べてきたことから、Ｊリーグチームの存在は、地域住民による一定の消費を生み出すだけでなく、地域外の人々による地域内での消費をもたらす、地場産品を地域外に発信する存在となるなど、地域経済にとって貴重な存在であるといえる。

Ｊリーグチームとスポーツ振興

Ｊリーグチームが地域経済に大きな効果をもたらしていることは先述した。しかし、Ｊリーグチームが地域にもたらす効果の中には、経済面以外のもも多く存在している。本章では、経済面以外でのチームと地域のかかわりについて、先述のＪリーグ規約にも記されている、サッカーを含むスポーツ振興という側面を中心として見ていく。

Ｊリーグチームは、様々な形のスポーツ振興活動を行っている。サッカーに関しては、

⁴ ただし、小中学生年代については、チームを設置しなくとも、同年代向けのサッカースクールの開講をもって代替することが認められている。

各チームに小中高各年代別のアカデミーチーム⁴の設置が義務付けられている。これらのチームは、将来のトップチーム選手を育成するための機関という側面もあるが、地域におけるサッカーの競技レベルを上げ、振興につなげる効果も有しているといえる。ガイナレも高校生・中学生年代のチームを保有しているが、チームは優秀な指導者の下で県内トップ級の実力を誇っており、県内のサッカーの競技レベルの向上に資するとともに、都市部ほど恵まれていなかった青少年のサッカーの競技環境を整えることにも貢献している。

サッカー以外の面でのスポーツ振興の取り組み状況は、チームによって異なる。その中で、ガイナレは他チームには見られない取り組みを行っている。その名も「復活！公園遊び」と呼ばれる活動であり、チームのホームタウン活動の目玉となっている。この活動は、アマチュア時代の二〇〇三年から行われており、当時は選手たちが地域の公民館や小学校などを巡回して、子どもたちと鬼ごっこやドッジボールなどの体を使った遊びを行うことで、スポーツの楽しさを伝える活動を行っていた。現在は、選手ではなく普及スタッフ⁵が主に担当し、自ら巡回するだけではなく、地域からの開催依頼も受ける形で活動している。



チュウブYAJINスタジアム

る。

さらに、ガイナレは、上述のようなスポーツの場の提供や技術の指導だけでなく、ハード面の整備まで自ら取り組み始めた。二〇一〇年に、ガイナレは日本初の「市民募金によるスタジアム」を米子市に建設するというプロジェクトを立ち上げた。募金集めは難航し、現在でも目標金額には達していないが、

⁵ チーム主催のサッカースクールのコーチなどの元選手が多い。

企業からの協賛金や金融機関の融資を基に資金を調達し、二〇一二年一月に「チュウブ YAJIN スタジアム」(写真) が完成した。

スタジアムは現在、主にチームの練習拠点や試合会場として活用されているが、スタジアムの横に整備した芝生広場は、小学生のサッカー大会や市民のグラウンドゴルフ会場などとして活用されており、市民がスポーツを行う場を提供できている。

ここまでの記述から、Jリーグチームは単に地域でプロサッカーの興行を行うだけではなく、チームが創意工夫を凝らし、サッカーを含めた様々なスポーツを行う機会を市民に提供する役割も担っており、地域のスポーツ振興の旗振り役となっていると言えるだろう。

おわりに

本稿は、Jリーグチームと地域の関係、チームが地域にもたらす効果を明らかにした。より幅広く、深い分析を行いたかったが、紙面の都合上分析は以上にとどまる。最後に、本稿を執筆する動機を筆者にもたらしにくれた、ガイナレへのエールを述べさせていだきたい。

地域にガイナレという存在があることで、様々な効果が地域にもたらされていると筆者

は考えている。ここまで述べてきた経済効果やスポーツ振興効果だけでなく、地域の中のつながりももたらしている存在なのである。

実際に、Jリーグが二〇一三年に行ったスタジアム観戦者調査によると、ガイナレの試合観戦者の平均同伴者数は、浦和レッズに続いて多い三七人であった。この事実から、鳥取県においては、ガイナレの試合を「みんなで見に行く」文化ができている、すなわち、ガイナレを懸け橋として、友人や家族、地域の人々とのつながりが強化されていると言えるのではなからうか。このようなつながりは簡単には生み出すことができない。まさに、地域の財産であると言えよう。

ガイナレは、Jリーグ参入後成績が低迷している。プロである以上、成績が第一に問われることは仕方がない。それゆえ、インターネットの掲示板などではチームへの批判の声、あるいは、行政がチームを支援することを批判する声がみられる。

しかし、ガイナレは地域にさまざまなものをもたらし続けてきている。地域において、ガイナレに代替しうる存在を発掘することは決して容易なことではないだろう。ならば、チームを応援し、支え続けていくことが、地域にとって最もよい選択肢なのではないか。

門脇 康太

(かどわき こうた)

京大公共政策大学院8期生。鳥取県米子市出身。幼少時より運動が苦手であったが、スポーツ観戦には強い関心を抱き、中学生時代の2004年からガイナレ鳥取のサポーターに。サポーターとしてチームの勝利を強く願いつつ、たとえ勝てない日々が続いても、チームがある限り一生応援していきたいと考えている。夢は、ガイナレがJ1で優勝する姿を自分の目で見ること。

たとえチームが弱くとも、ガイナレという存在そのものが地域にとっての貴重な財産なのだから。

がんばれ、ガイナレ！

